

小学校児童の住空間に対する認識と志向

(第3報) 児童の住空間に対する評価判断の実態とその影響要因

中 島 喜代子

Primal School Children's Recognition and Directional Intention of Dwelling House and Home Life (Part 3)

Primal School Children's Estimation of Their House, and the Factors Which Have Influence upon It

Kiyoko NAKAJIMA

1. 緒 言

本研究の第1報では、住宅内にある生活用品の配置・収納場所に対する認知の側面から、第2報では児童をとりまく家庭環境の実態に対する認知の側面から、それぞれ住空間に対する児童の認識の実態とその発達について検討した。

引き続き本報では、児童が住宅に対してどの程度評価判断することが可能かをとらえ、さらに母親の住評価と比較して、児童の住評価が妥当なものであるかどうかを解析することにより、住空間に対する児童の認知の実態を明きらかにし、認知を促がす要因と影響度を把握しようとするものである。

本報における研究の手順は、児童が居住する住宅に関して、15の諸側面をとりあげ、まずそれらに対して評価の判断が可能かどうかを性別、学年別に検討してその差異を明きらかにする。次に、住評価判断可非の構造をとらえるため、因子分析を行なう。また、児童の住評価とその母親の住評価との関連性の強弱を検討することにより、児童の住評価の正当性について分析する。さらに、児童の住評価判断可能個数とその影響要因との関連を検討し、児童の住空間認識に影響を与える要因について分析を加える。

2. 研究の方法

調査の方法、時期、対象は、第1報、第2報と同様で、1983年7月三重県四日市市の小学校3年生～6年生の児童とその母親を対象として間接留置式のアンケート調査を実施し、530件の有効回答を得た。本報では、この530件の対象について分析を行なう。なお、調査対象の概要は、第1報に示すとうりである。

児童の住評価と住評価判断の傾向をとらえるため、表1に示すように、〈住宅の全体的広さ〉〈各部分空間の広さ〉〈家具関係〉〈自然環境条件〉〈設備空間の機能性〉〈住宅の全体的評価〉〈平面プラン〉の諸側面について、相互に対応関係をもつ児童用と母親用の住評価項目を作成した。それぞれの住評価項目を、〈項目の性格〉として、〈空間の実態的側面〉〈空間の機能性に関する側面〉に分類し、〈空間の広がり〉として、〈各部分空間〉〈住宅全体〉〈地域空間〉に分類した。

各項目のカテゴリーは、児童では「よい」「わるい」「わからない」の3分類とし、母親については「満足」「なんともいえない」「不満足」の3選択とした。

表1 住評価項目

住 評 価 項 目		項 目 分 類			
児 童 用	母 親 用	項 目 区 分	項 目 の 性 格	空 間 の 広 が り	
1. へやの数 2. 家全体の広さ	1. 部屋の数 2. 住戸面積 (住宅全体の広さ)	住宅の全体的 広さ	空間の実態的 側 面	住宅全体	
3. 家族がくつろぐへやの広さ 4. 家族がごはんを食べるへやの広さ 5. 台所の広さ 6. 自分がねるへやの広さ 7. おし入れ、なん戸の広さ 8. にわの広さ	3. 居間の広さ 4. 食事室の広さ 5. 台所の広さ 6. 個室、寝室の広さ 7. 押入れ、納戸、物入れなどの広さ 8. 庭の広さ	各部分空間の 広 さ		家族共用空間 家事労働空間 私 的 空 間 収 納 空 間 外 部 空 間	
9. 家具のおき場所 10. 家具の数	9. 家具の配置 10. 家具の数量	家具 関 係		空間の機能性 に関する側面	住宅全体
11. 日あたり、明るさ、風とおし 12. まわりの自然	11. 日照、採光、通風 12. 周辺の自然環境	自然環境条件		空間の実態的 側 面	住宅全体 地 域 空 間
13. 台所、便所、ふろのせつび (水洗トイレ、 シャワーなど)	13. 台所、便所、風呂の設備	住宅の設備		空間の機能性 に関する側面	設備空間
14. 家の古さ	14. 住宅の老朽度	住宅の全体的 評 価		住宅の実態的 側 面	住宅全体
15. 家の間取	15. 住宅全体の間取り	平面プラン		空間の機能性 に関する側面	

3. 調査結果および考察

1) 住評価項目別にみた児童の住評価判断の傾向
 現在居住している住宅に対して、児童がどの程度
 評価判断できるのかをとらえるため、児童が各住評
 価項目に対して「よい」または「わるい」と答えた
 場合は児童の評価判断が可能な状態であると考
 えて、「わからない」と答えた場合には評価判断不能と考
 えて、この視点から分析を行なう。

図1に、各住評価項目に対して、児童が「よい」
 または「わるい」と答えた割合 (以後「住評価判断
 率」と記す) を、対象全体と男女別について示す。
 全項目が70%以上の「住評価判断率」を示し、また
 1項目を除き他の14項目ではすべて80%以上の割合
 となっており、この年齢段階で住空間に対する評価
 判断はほぼ可能であると考えられる。

項目別に「住評価判断率」をみると、〈各部分空間
 の広さ〉のうち、その部屋で行なう行為が明確で限
 定している空間である「⑥本人の寝室の広さ」「④食
 事室の広さ」「⑤台所の広さ」の「住評価判断率」は
 高く、〈住宅の全体的広さ〉を示す「①部屋数」と若
 干値は下がるが「②住戸面積」も同様に高い。また、

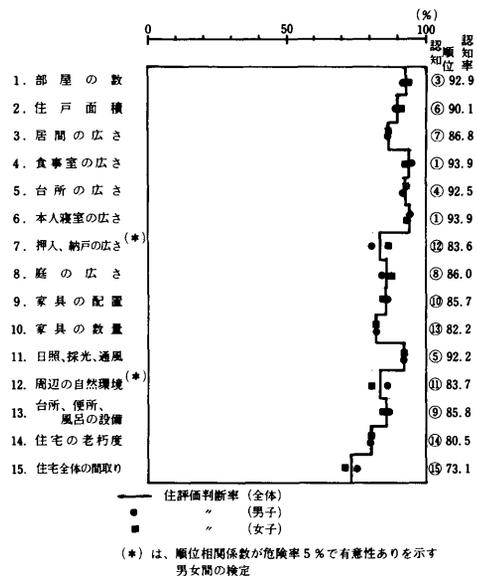


図1 児童の住評価判断率

〈自然環境条件〉のうち、住宅の室内気候を示す「⑪
 日照・採光・通風」の「住評価判断率」も高く、こ

これらの項目は「項目の性格」が「空間の実態の側面」を示す項目であり、すべて「住評価判断率」が90%を越えている。

逆に、「空間の広がり」が「住宅全体」にわたり、住宅を全体的に把握する視点が必要とされる「⑬住宅全体の間取り」や「⑭住宅の老朽度」の「住評価判断率」がもっとも低くなっている。また、「項目の性格」が「空間の機能性に関する側面」であり、空間の使い方や機能性と関わる「⑨家具の配置」「⑩家具の数量」「⑬台所、便所、風呂の設備」に対する「住評価判断率」も相対的に低く、「自然環境条件」のうち、「空間の広がり」が「地域空間」を対象とする「⑫周辺の自然環境」も低い。「④押入、納戸の広さ」のうち、主に親の管理空間である「④押入、納戸の広さ」と、その部屋で行なう行為があまり明確でな

く特に限定されない「③居間の広さ」や「外部空間」である「⑧庭の広さ」に対する「住評価判断率」も同様に低い傾向を示している。

次に、男女別に性の違いによる「住評価判断率」の差異について検討する。男女別と住評価判断可能、不能との順位相関係数が危険率5%以上の有意性を示す項目は「⑦押入、納戸の広さ」と「⑫周辺の自然環境」であり、住戸内の生活用品の収納と関わる前者では女子の「住評価判断率」が高く、住宅の外へ広がる「地域空間」を対象とした後者では、男子の方が高くなっており、違いがみられるがその他の項目ではほとんど差は認められない。

2) 学年別にみた児童の住評価判断の傾向

図2に、各住評価項目に対する児童の「住評価判

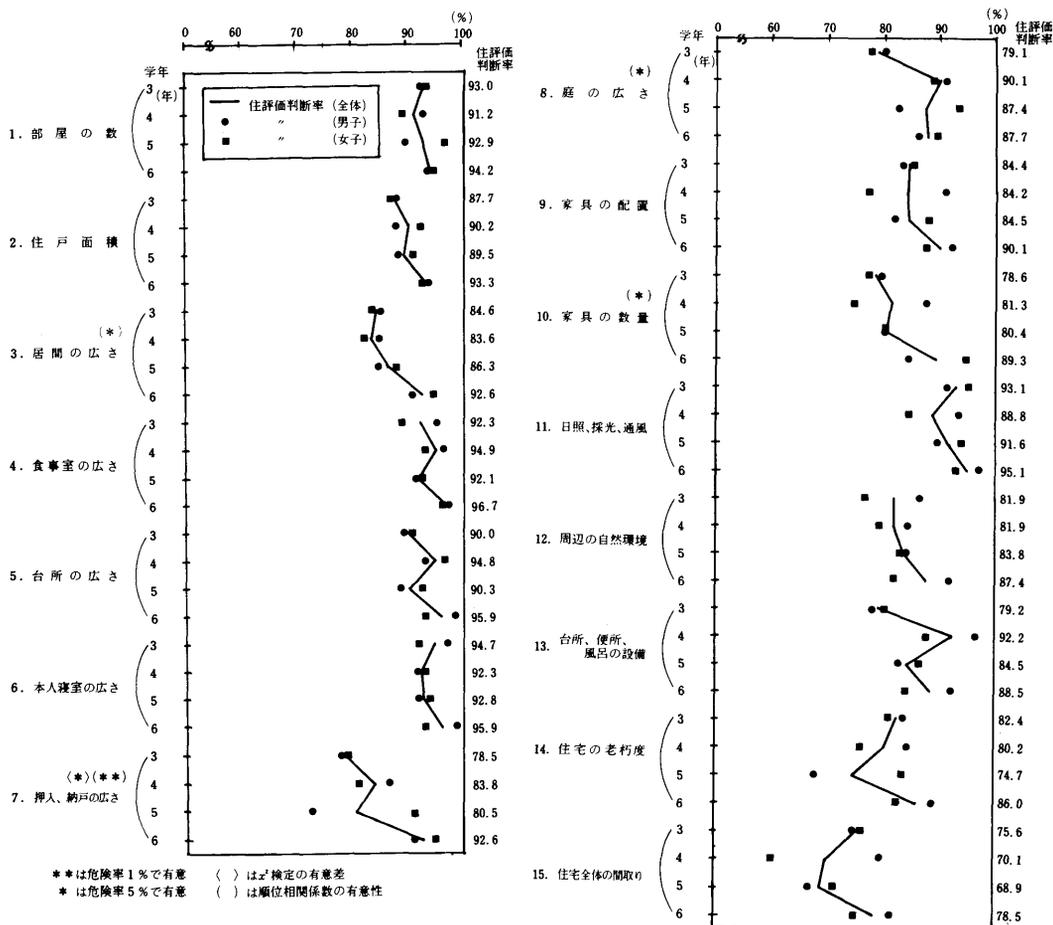


図2 児童の住評価判断率 (学年別)

断率」を、学年別に示し、学年と「住評価判断率」との関係を検討する。

小学校3年生～6年生の全学年を通じて90%を越える「住評価判断率」を示す項目は、「①部屋数」「④食事室の広さ」「⑤台所の広さ」「⑥本人寝室の広さ」「⑩日照・採光・通風」で、前節で「住評価判断率」が高いものとして示した項目と同様であり、小学3年生段階で認知がほぼ確立する部分といえよう。逆に、全学年を通じて90%未満の低い「住評価判断率」を示す項目は、「⑫周辺の自然環境」「⑭住宅の老朽度」「⑮住宅全体の間取」であり、〈空間の広がり〉が〈住宅全体〉におよび、〈空間の機能性に関する側面〉や〈住宅の全体的評価〉など、住宅全体の把握が必要とされる項目や、〈地域空間〉を対象とした項目であり、これらは、小学生段階ではやや認知が困難な部分であるといえよう。

学年と住評価判断可能・不能との順位相関係数の有意性が5%水準以上の項目、すなわち学年が進むと「住評価判断率」が上昇する傾向をもつ項目は、「③居間の広さ」「⑦押入・納戸の広さ」「⑩家具の数量」「⑧庭の広さ」であり、前3者は6年生から「住評価判断率」が上昇し、後者は4年生から上昇している。また、有意性はないが、同様の傾向を示しているものに「⑨家具の配置」があり、これも6年生から「住評価判断率」が上昇している。すなわち、〈各部分空間の広さ〉の中で、空間の性格がやや不明確な空間や主に親の管理空間に属する空間、あるいは〈空間の機能性に関する側面〉の理解が必要な部分では小学校6年生で「住評価判断率」がほぼ90%に到達し、認知が確立するといえよう。

3) 児童の住空間に対する認知構造

児童の住空間に対する認知構造を把握するため、各住評価項目について評価判断可能（「はい」もしくは「いいえ」と答えた場合）・不能（「わからない」と答えた場合）のカテゴリ分類で因子分析を行なった。その結果を、表2に示す。

因子は、第4因子まで抽出されたが、第1因子の寄与率が66.8%と大きく、第2～第4までは、約10%前後の寄与率となっている。まず、第1因子では、因子負荷量0.40を越えている項目は「⑨家具の配置」「⑩家具の数量」などの家具関係の項目であり、家具関係の因子といえる。第2因子は「④食事室の広さ」「⑤台所の広さ」が因子負荷量0.40を越えており、次に「⑥本人寝室の広さ」がこれに続いているが、これらはすべて「住評価判断率」の高い項目である。

すなわち、〈各部分空間の広さ〉のうち、行為目的の明確な部屋の広さに関する因子といえよう。第3因子は、「⑭住宅の老朽度」「⑮住宅全体の間取」項目が、因子負荷量0.40を越えているが、これらは特に「住評価判断率」の低い項目である。この因子は、住宅の全体的把握を必要とする評価項目に関する因子といえよう。第4因子は、「①部屋数」「②住戸面積」が因子負荷量0.40を越えており、この因子は住宅全体の面積的側面に関する評価の因子といえよう。

表2 児童の住評価因子分析結果（認知、非認知）

住 評 価 項 目	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4
1 部 屋 の 数	0.15472	0.06589	0.14740	0.55686
2 住 戸 面 積	0.16196	0.19662	0.03489	0.58996
3 居 間 の 広 さ	0.11441	0.23228	0.19748	0.37984
4 食 事 室 の 広 さ	0.12754	0.63011	-0.00149	0.16622
5 台 所 の 広 さ	0.03241	0.50500	0.14422	0.10183
6 本 人 寝 室 の 広 さ	0.09187	0.28409	0.15390	0.15586
7 押 入、納 戸 の 広 さ	0.37133	0.24305	0.28344	0.04592
8 庭 の 広 さ	0.28660	0.03859	0.20520	0.15753
9 家 具 の 配 置	0.60347	0.24243	0.14920	0.13827
10 家 具 の 数 量	0.67953	0.03586	0.14685	0.26780
11 日 照、採 光、通 風	0.13400	0.24808	0.22372	0.01887
12 周 辺 の 自 然 環 境	0.20705	0.25149	0.28671	0.13242
13 台 所、便 所、風 呂 の 設 備	0.16089	0.23193	0.32226	0.26963
14 住 宅 の 老 朽 度	0.13033	0.16838	0.63260	0.08132
15 住 宅 全 体 の 間 取	0.24731	0.02512	0.49487	0.25545
寄 与 率 (%)	66.8	13.5	10.8	8.8

注 □□□□ 因子負荷量0.40以上のもの

□□□□□□ 因子負荷量0.40未満であるが、各変数の因子負荷量が全因子中で一番大きいもの

4) 住空間に対する母親の評価と児童の評価との関連

前節まで、児童が各住評価項目について判断可能かどうかという視点から、児童の空間認知について分析を行なったが、本節では、児童が行なった判断（「よい」または「わるい」）の正当性を検討するため、その一つの方法として、児童の住評価と母親の住評価とを比較することを試みた。

児童が各住評価項目について「よい」「わるい」「わからない」と答えたもののうち、「わからない」と答えたものを除き、「よい」もしくは「わるい」と評価したものと、母親が「満足」「なんともいえない」「不満足」のカテゴリで評価したものとに関連について検討する。母親の3段階の住評価に対して、児童が「よい」あるいは「わるい」と答えた住評価の割

合を図3に示し、表3には児童の住評価と母親の住評価との順位相関係数を示す²⁾。

まず、小学校3年生～6年生の対象全体の傾向に

ついて検討する。全項目とも母親が「不満足」と答えている場合においても、児童が「よい」と答える率がかなり高い傾向があり、一般的に母親の方が住

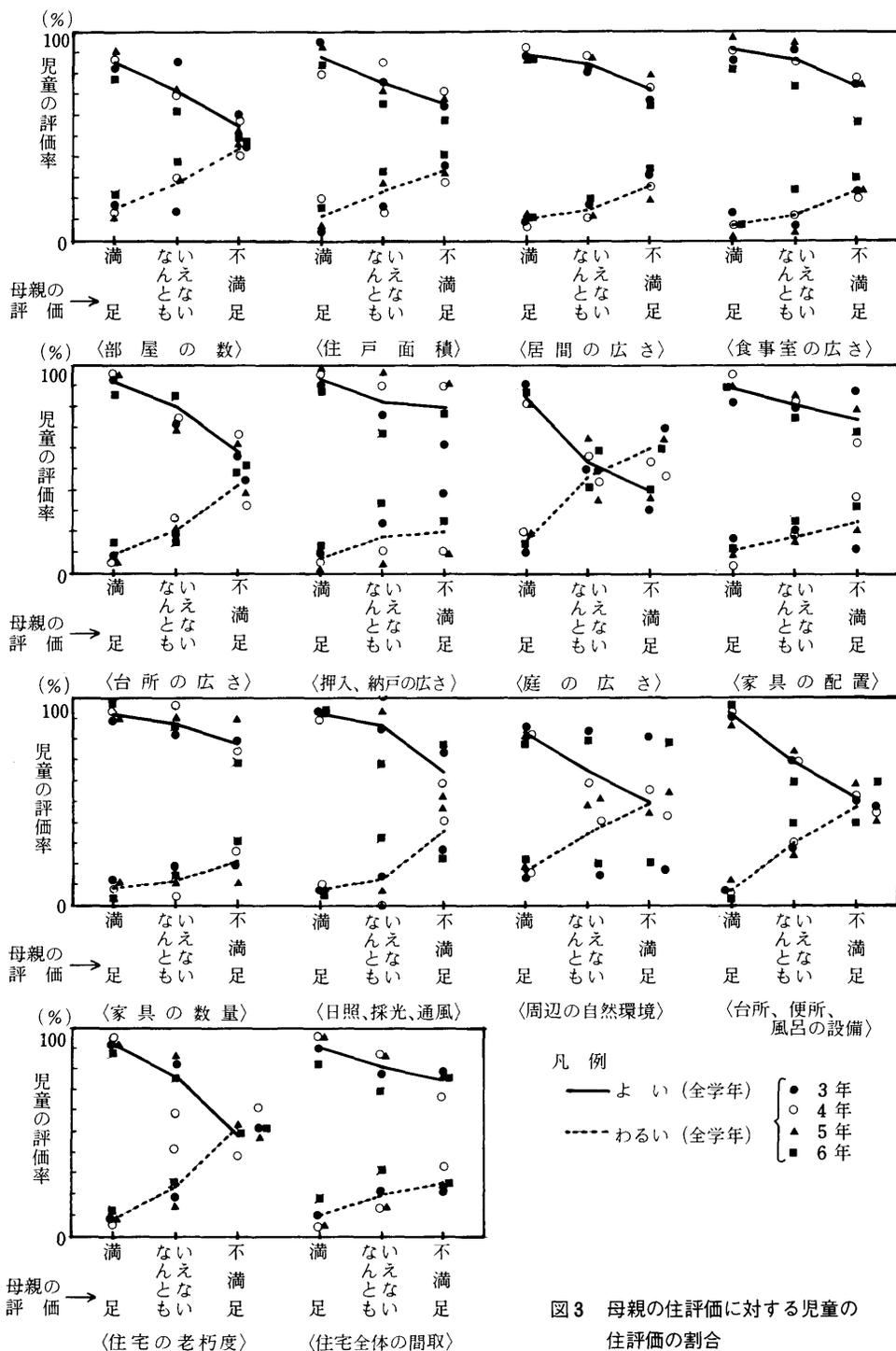


図3 母親の住評価に対する児童の住評価の割合

表3 母親の住評価と児童の住評価の順位相関係数

住 評 価 項 目	全 体	3 年	4 年	5 年	6 年
部 屋 の 数	** 0.27291 ⑤(1)	* 0.19198 ⑧(4)	** 0.25723 ⑦(2)	** 0.35643 ②(1)	** 0.24510 ⑦(3)
住 戸 面 積	** 0.21424 ⑦(1)	** 0.26020 ⑥(1)	** 0.07346 ⑬(4)	** 0.23124 ⑧(3)	** 0.24925 ⑥(2)
居 間 の 広 さ	** 0.15642 ⑩(1)	** 0.19684 ⑦(2)	* 0.17429 ⑨(3)	** 0.06903 ⑫(4)	** 0.20694 ⑩(1)
食 事 室 の 広 さ	** 0.17211 ⑨(1)	** 0.10753 ⑪(4)	* 0.13190 ⑪(3)	** 0.21935 ⑨(2)	** 0.22444 ⑨(1)
台 所 の 広 さ	** 0.32244 ④(1)	** 0.35743 ③(2)	** 0.27126 ④(4)	** 0.30441 ⑤(3)	** 0.36196 ④(1)
押 入 ・ 納 戸 の 広 さ	** 0.12072 ⑫(1)	** 0.26531 ⑤(1)	** 0.04081 ⑭(4)	** 0.06802 ⑬(3)	** 0.11320 ⑬(2)
庭 の 広 さ	** 0.43507 ①(1)	** 0.52444 ①(1)	** 0.27778 ③(4)	** 0.44142 ①(2)	** 0.42160 ②(3)
家 具 の 配 置	** 0.11806 ⑬(1)	** -0.03265 ⑭(4)	** 0.25928 ⑥(1)	** 0.09728 ⑪(3)	* 0.17234 ⑫(2)
家 具 の 数 量	** 0.10421 ⑭(1)	** 0.07822 ⑫(3)	* 0.11918 ⑫(2)	** 0.00031 ⑭(4)	** 0.23040 ⑧(1)
日 照 ・ 採 光 ・ 通 風	** 0.19159 ⑧(1)	* 0.11663 ⑩(4)	** 0.17292 ⑩(3)	** 0.26732 ⑥(1)	** 0.18959 ⑪(2)
周 辺 の 自 然 環 境	** 0.25818 ⑥(1)	** 0.02640 ⑬(4)	** 0.26573 ⑤(3)	** 0.34096 ③(2)	** 0.36476 ③(1)
台 所 ・ 便 所 ・ 風 呂 の 設 備	** 0.35710 ②(1)	** 0.37261 ②(2)	** 0.35592 ②(3)	** 0.24037 ⑦(4)	** 0.47846 ①(1)
住 宅 の 老 朽 度	** 0.35623 ③(1)	** 0.34987 ④(2)	** 0.49559 ①(1)	** 0.31684 ④(3)	** 0.31114 ⑤(4)
住 宅 全 体 の 間 取	** 0.13802 ⑪(1)	** 0.11818 ⑨(3)	** 0.25118 ⑧(1)	* 0.15424 ⑩(2)	** 0.04631 ⑭(4)

注、○内の数字は、各学年別の14変数間の順位を示す
 〈〉内の数字は、各変数別の学年間の順位を示す
 **は危険率1%水準で有意を示す
 *は危険率5%水準で有意を示す

空間に対して厳しく悪い評価を下している(図3)。しかし、順位相関係数は全項目において1%水準で有意となっており、母親の評価と児童の評価との関連性が認められる(表3)。

この順位相関係数の値と「住評価判断率」との関係性を考慮してパターン分類する。パターン1は、「住評価判断率」が90%未満とやや低いが、順位相関係数は0.25以上と高いパターンで、これには「⑭住宅の老朽度」「⑬台所・便所・風呂の設備」「⑫周辺の自然環境」「⑧庭の広さ」がある。パターン2は、「住評価判断率」が90%未満とやや低く、順位相関係数も0.20未満と低いパターンで、これには「③居間の広さ」「⑮住宅全体の間取」「⑨家具の配置」「⑩家具の数量」「⑦押入・納戸の広さ」がある。パターン3は、「住評価判断率」が90%以上と高く、順位相関係数も0.25以上と高いパターンで、これには「⑤台所の広さ」「①部屋数」がある。パターン4は、「住評

価判断率」は90%以上と高いが、順位相関係数は0.25未満とあまり高くはないパターンで、これには「②住戸面積」「⑪日照・採光・通風」「④食事室の広さ」がある。

パターン3は、空間に対する認知が早い時期から可能で、しかもその認知が正当な項目である。パターン1は、空間に対する認知は遅れるが、その認知は正当な項目である。パターン1、パターン3ともに、〈項目の性格〉が〈空間の実態的側面〉に集中しており、児童の客観的な判断が容易な項目と考えられる。パターン2は、空間に対する認知が遅れ、しかもその認知が正当とはいえないと思われる項目であり、これは主に住空間の使い方や収納スペースなど〈項目の性格〉が〈空間の機能性に関する側面〉と、〈各部分空間の広さ〉のうち、親の管理空間や部屋の用途が明確でない項目である。すなわち、住生活と住空間の両面について深い理解が必要であり、

しかもその両者の関連の適合性についての判断も必要とする項目といえよう。これに対し、パターン1と3は、特別それを必要としない項目と考えられる。

この分析をさらに深めるため、評価判断の因子分析を行なった結果からとらえた類似性をもつ項目同士で、順位相関係数に差異をもつ項目間の比較検討を行なう。

まず、因子分析の結果同一の第3因子に含まれた「⑭住宅の老朽度」と「⑮住宅全体の間取」は、順位相関係数では前者(0.35623)は高く、後者(0.13802)は低くなっている。これは、住生活の内容やそれとの対応関係を特別考慮しなくても判断可能な住宅の新旧判断の側面に対し、それが特に必要な間取の側面との違いである。また、同一第4因子に含まれた「①部屋数」「②住戸面積」の場合、前者(0.27291)はやや高く、後者(0.21424)はやや低くなっている。これは、単に居室の数だけを問題にする場合より、居室だけでなく廊下、玄関などの交通部分や収納空間、設備空間など居室以外の空間全体を含めた空間の広さに対する評価が必要であり、より判断が困難であることを示している。さらに、同一第2因子に含まれた「⑤台所の広さ」と「④食事室の広さ」の場合、前者(0.32244)の順位相関係数は高く、後者(0.17211)は低くなっており、後者はむしろ「③居間の広さ」(0.15642)と近い値をとっている。これは、台所が作業空間として、主に物理的動線上の広さ要求に関連をもつものに対し、食事室の場合、家族の団らんや休息の要因も加わり、単に物理的広さにだけでなく、別の広さ要求の要素が前者より強いとめと考えられる。

上記の事柄とともに、「住評価判断率」が低い「⑯周辺の自然環境」や「⑧庭の広さ」などの「屋外空間」<地域空間>を対象とした項目の順位相関係数が比較的高いことから、物理的に広い空間を対象としているかどうかが順位相関係数を左右するものではなく、その意味内容の深さと広さに関わるといえる。

5) 児童の住評価判断に影響をおよぼす要因

居住している住宅に対する児童の評価判断力が、どのような要因によって影響を受けているかについて検討する。

15の住評価項目のうち「⑧庭の広さ」を除いた14項目を(「⑧庭の広さ」については、庭を所有しない家庭もあるため除いた)、<項目区分>より<住宅の全体的広さ>(①②の2項目)、<各部分空間の広さ>

(③~⑦の5項目)、<家具関係>(⑨⑩の2項目)、<自然環境条件>(⑪⑫の2項目)、<空間の広がり>より<住宅全体>(⑬⑭⑮の4項目)、<項目の性格>より<空間の機能性に関する側面>(⑯⑰⑱⑲の4項目)と、<親の管理空間>(⑳㉑の2項目)に分類し(一部同一項目が多側面に重複して分類されている場合もある)、さらに全評価項目(14項目)も加え、それぞれの分類について、評価判断可能な項目数を加算し、各分類における評価判断可能数を算出した。

一方、影響要因として、前報と同様に、児童本人の条件(学年、性別の2要因)、家族条件(家族人数、本人の続柄、兄弟数の3要因)、社会的階層条件(父親の学歴、母親の学歴の2要因)、住空間条件(住宅形式、住宅の部屋数、現住宅への入居年度、所有関係の4要因)、児童の住空間に対する興味・関心(友達、両親、マスコミなどを通じた住空間の情報接触からみた住空間に対する興味・関心の7要因)の5条件、18要因をとりあげる。

この各要因のカテゴリー別に、先に示した各住評価分類の平均値を算出した(各分類の平均値算出において、1項目でも無回答がある場合は、それぞれの対象から除いた)。その結果を、平均値の差の検定、順位相関係数の有意性、 χ^2 検定とともに、表4~6に示し、<全評価項目>については、影響要因別の住評価判断個数の累積度数分布を、図4~8に示す。

<全評価項目>における住評価判断個数と影響要因との関連をみると、<児童本人の条件>では、「性別」による差はみられない(図4、表4)。<家族条件>では「家族人数」と「兄弟数」に関連がみられ、家族人数および兄弟数が多いほど住評価判断個数が多くなる傾向がある(図5、表4)。<社会的階層条件>では「父親の学歴」「母親の学歴」ともに関連があり、いずれも学歴が高いほど住評価判断個数が多くなっている(図6、表5)。<住空間条件>では「住宅形式」「部屋数」「所有関係」に関連があり、持家あるいは一戸建の場合および部屋数が8室以上の広い住宅に居住している場合に住評価判断個数が多くなっている(図7、表5)。また、<児童の住空間に対する興味・関心条件>では、7要因すべてに関連がみられ、いずれも住空間に対する理想像や要求などが明確でなく、それらが意識化されていない場合(各項目に「わからない」と答えている場合)に、住評価判断個数が少ない傾向が認められるが、住空間に対して示す興味、関心が積極的な場合と消極的な場合との差はほとんどみられない(図8、表6)。

表4 影響要因別住評価判断平均個数（児童本人の条件、家族条件）

() 内の数字は件数

条件 要因	住評価 カテゴリー	住宅の全 体的広さ (2項目)	各部分空 間の広さ (5項目)	家具関係 (2項目)	自然環境 条件 (2項目)	住宅全体 (4項目)	空間の機 能性に関 する側面 (4項目)	親の管理 空間 (2項目)	全 評 価 (14項目)
		児童本人の条件	学 年	3 年 1.81 (128)	4.43 (128)	1.64 (124)	1.75 (127)	3.42 (128)	3.23 (124)
	4 年	1.84 (109)	4.49 (115)	1.69 (110)	1.70 (115)	3.34 (108)	3.32 (108)	1.76 (115)	12.35 (100)
	5 年	1.82 (153)	4.43 (147)	1.65 (153)	1.75 (154)	3.28 (149)	3.20 (149)	1.66 (154)	12.05 (140)
	6 年	1.87 (118)	4.74 (122)	1.79 (120)	1.82 (119)	3.51 (117)	3.45 (119)	1.81 (122)	12.74 (115)
	検 定		(*)					(**)	
	性 別	男 子 1.82 (271)	4.50 (273)	1.70 (271)	1.79 (276)	3.38 (265)	3.32 (266)	1.68 (278)	12.33 (251)
	女 子	1.86 (237)	4.54 (239)	1.68 (236)	1.72 (239)	3.38 (237)	3.26 (234)	1.71 (242)	12.31 (220)
	検 定				(*)(*)				
家 族 条 件	家族人数	3 人 1.76 (62)	4.21 (61)	1.54 (61)	1.72 (64)	3.18 (61)	3.08 (60)	1.56 (62)	11.63 (54)
	4 人	1.83 (191)	4.61 (195)	1.67 (193)	1.74 (192)	3.38 (188)	3.25 (189)	1.74 (197)	12.35 (177)
	5 人	1.90 (134)	4.52 (135)	1.75 (134)	1.78 (138)	3.44 (133)	3.40 (133)	1.68 (139)	12.52 (125)
	6人以上	1.90 (87)	4.59 (86)	1.76 (85)	1.77 (87)	3.47 (87)	3.46 (85)	1.72 (87)	12.60 (84)
	検 定	(**)	(*)(*)(**)	(*)			(*)		(**)
	本人続柄	長 子 1.81 (247)	4.47 (249)	1.68 (248)	1.72 (250)	3.31 (242)	3.27 (243)	1.69 (254)	12.18 (225)
	長子以外	1.91 (221)	4.61 (223)	1.71 (221)	1.79 (225)	3.50 (221)	3.34 (220)	1.72 (226)	12.53 (212)
	検 定	(*)(*)(*)	(*)			(*)(*)			
	兄弟数	1 人 1.82 (56)	4.23 (57)	1.63 (56)	1.79 (58)	3.29 (55)	3.22 (55)	1.61 (59)	11.92 (48)
	2 人	1.82 (254)	4.55 (258)	1.67 (256)	1.73 (259)	3.37 (250)	3.26 (251)	1.69 (260)	12.30 (237)
	3人以上	1.92 (164)	4.60 (162)	1.75 (161)	1.78 (164)	3.48 (164)	3.41 (161)	1.74 (166)	12.59 (155)
	検 定	(*)(*)	(*)(*)(*)						(*)

** は危険率1%で有意を示す

() は平均値の差の検定における有意差

* は危険率5%で有意を示す

() は順位相関係数における有意性

< > はχ²検定における有意差

各住評価分類別に住評価判断個数を検討する。〈住宅の全体的広さ〉と〈各部分空間の広さ〉では、〈家族条件〉との関連がみられ、家族人数や兄弟数が多く、長子以外の場合に住評価判断個数が多く、空間認知を促がす要因となっている。〈住空間条件〉では部屋数が8室以上と多い場合に多い傾向がみられる。また、〈各部分空間の広さ〉においては、〈児童の住空間に対する興味・関心条件〉の要因にも関連がみられる。

また、「住評価判断率」が低い傾向を示した〈家具

関係〉や〈空間の機能性に関する側面〉〈親の管理空間〉〈住宅全体〉では、〈社会的階層条件〉との関連がみられ、父母の学歴が高いほど住評価判断個数が多くなり、空間認知を促す要因となっている。また、〈家具関係〉〈空間の機能性に関する側面〉〈親の管理空間〉では、〈住宅条件〉が持家や一戸建および部屋数が8室以上と多い場合に住評価判断個数が多く、〈児童の住空間に対する興味・関心条件〉との関連もみられる。

表5 影響要因別住評価判断個数(社会的階層条件、住空間条件)

()内の数字は件数

条件 要因	住 評 価		住宅の全 体的広さ (2項目)	各部分空 間の広さ (5項目)	家具関係 (2項目)	自然環境 条 件 (2項目)	住宅全体 (4項目)	住宅の機 能性に関 する側面 (4項目)	親の管理 空 間 (2項目)	全 評 価 (14項目)
	カテゴリー									
社会的 階層 条件	父 親 の 学 歴	中 学 校 卒	1.85(141)	4.45(141)	1.65(139)	1.74(144)	3.31(137)	3.13(135)	1.61(145)	12.13(128)
		高 校 卒	1.83(207)	4.59(208)	1.78(207)	1.78(213)	3.41(207)	3.44(206)	1.74(211)	12.51(197)
		(短)大 学 卒 検 定	1.94(86)	4.64(89)	1.77(88)	1.83(83)	3.62(85)	3.55(87)	1.80(88)	12.80(81)
	母 親 の 学 歴	中 学 校 卒	1.84(126)	4.41(125)	1.62(125)	1.73(129)	3.32(123)	3.10(121)	1.58(129)	12.13(115)
		高 校 卒	1.83(260)	4.57(258)	1.71(257)	1.76(262)	3.40(258)	3.36(256)	1.72(263)	12.38(242)
		(短)大 学 卒 検 定	1.97(62)	4.65(66)	1.88(64)	1.86(63)	3.58(62)	3.65(63)	1.86(65)	12.98(58)
住 空 間	住 宅 形 式	一 戸 建	1.86(387)	4.59(393)	1.71(390)	1.75(395)	3.42(384)	3.35(386)	1.73(398)	12.45(365)
		連 続 建	1.87(30)	4.57(28)	1.57(30)	1.72(29)	3.41(29)	3.03(29)	1.64(28)	12.07(27)
		共 同 建	1.70(27)	4.11(27)	1.50(26)	1.79(28)	3.12(26)	2.84(25)	1.45(29)	11.50(22)
		検 定		(*)(*)	(*)			(*)(**)	(*)(**)(*)	(*)
	部 屋 数	3 室 未 満	1.80(61)	4.36(59)	1.55(62)	1.74(65)	3.31(58)	3.00(60)	1.64(64)	11.96(50)
		4 室	1.82(66)	4.42(67)	1.67(67)	1.77(65)	3.32(65)	3.17(65)	1.60(67)	12.14(59)
		5 室	1.75(103)	4.44(106)	1.61(103)	1.70(106)	3.17(103)	3.17(102)	1.69(107)	11.96(99)
		6 室	1.97(69)	4.79(70)	1.90(69)	1.79(71)	3.67(69)	3.64(69)	1.85(71)	13.08(66)
		7 室	1.77(44)	4.36(44)	1.60(43)	1.64(44)	3.25(44)	3.16(43)	1.56(45)	11.63(40)
		8 室 以 上 検 定	1.96(103)	4.76(104)	1.77(103)	1.84(103)	3.64(102)	3.56(102)	1.84(104)	12.98(100)
条 件	入 居 年 度	昭 和 48 年 以 前	1.82(222)	4.45(224)	1.64(220)	1.75(229)	3.31(221)	3.22(218)	1.67(228)	12.17(204)
		〃 49~53年	1.88(106)	4.53(107)	1.73(107)	1.70(107)	3.41(104)	3.45(106)	1.70(108)	12.23(102)
		〃 54~56年	1.86(63)	4.68(65)	1.65(66)	1.83(63)	3.53(62)	3.31(64)	1.76(67)	12.73(56)
		〃 57・58年 検 定	1.88(42)	4.63(41)	1.88(41)	1.76(42)	3.52(42)	3.51(41)	1.76(42)	12.70(40)
	所 有 関 係	持 家	1.86(329)	4.59(331)	1.72(329)	1.76(335)	3.41(328)	3.37(326)	1.75(336)	12.49(311)
		借 家	1.82(114)	4.46(116)	1.63(115)	1.73(116)	3.36(111)	3.15(113)	1.64(118)	12.08(103)
		検 定			(*)			(*)(*)	(*)(*)	(*)

** は危険率1%で有意を示す

* は危険率5%で有意を示す

() は平均値の差の検定における有意差

() は順位相関係数における有意性

< > は χ^2 検定における有意差

表 6 影響要因別住評価判断平均個数

() 内の数字は件数

条件	要 因	住 評 価		住宅の全体的広さ (2項目)	各部分空間の広さ (5項目)	家具関係 (2項目)	自然環境 条 件 (2項目)	住宅全体 (4項目)	空間の機能性に関する側面 (4項目)	親の管理 空 間 (2項目)	全 評 価 (14項目)
		カテゴリー									
見 童 の 住 空 間 に 対 す る 興 味 関 心	友だちや近所の家で「いいなあ」と思うものがありますか	は い	1.83(315)	4.53(315)	1.68(311)	1.74(316)	3.39(309)	3.29(304)	1.71(318)	12.29(290)	
		い い え	1.88(133)	4.56(137)	1.75(138)	1.83(139)	3.51(133)	3.42(138)	1.70(140)	12.63(128)	
		わからない	1.82(49)	4.29(49)	1.57(49)	1.67(51)	3.04(49)	2.88(49)	1.55(51)	11.60(45)	
		検 定					(**)	(**)		(*)	
	本や雑誌を見て「いいなあ」と思う家がありますか	は い	1.84(323)	4.51(325)	1.65(321)	1.74(325)	3.36(317)	3.25(314)	1.71(330)	12.24(294)	
		い い え	1.86(134)	4.61(137)	1.76(137)	1.81(139)	3.54(134)	3.47(137)	1.74(140)	12.74(129)	
		わからない	1.82(44)	4.23(43)	1.72(43)	1.70(44)	3.16(44)	3.00(43)	1.40(43)	11.62(42)	
		検 定		(*)	(*)		(*)	(*)	(**)(*)(**)	(*)	
	テレビを見て「いいなあ」と思う家がありますか	は い	1.86(296)	4.56(300)	1.67(295)	1.76(301)	3.42(292)	3.28(290)	1.71(303)	12.39(271)	
		い い え	1.83(149)	4.61(147)	1.77(150)	1.81(151)	3.45(147)	3.48(148)	1.75(152)	12.59(142)	
		わからない	1.78(54)	4.05(56)	1.56(54)	1.56(54)	3.07(54)	2.85(54)	1.43(56)	11.16(50)	
		検 定		(**)(*)(**)		(**)	(*)	(*)	(**)	(**)(*)(**)	(**)(**)
友だちどうして住宅について話をするがありますか	は い	1.87(110)	4.61(109)	1.80(108)	1.77(111)	3.50(109)	3.52(107)	1.81(112)	12.70(104)		
	い い え	1.84(335)	4.55(338)	1.68(335)	1.76(339)	3.41(331)	3.30(330)	1.70(342)	12.37(309)		
	わからない	1.78(54)	4.18(56)	1.54(56)	1.68(56)	3.00(54)	2.79(56)	1.46(57)	11.25(51)		
	検 定		(**)(*)(**)	(*)(**)(*)		(**)(**)(**)	(**)(**)(**)	(**)(**)(**)	(**)(**)(**)		
お父さんやお母さんとどんな家が好きだかという話をしたことがありますか	は い	1.81(205)	4.52(206)	1.71(201)	1.77(204)	3.39(201)	3.37(197)	1.75(208)	12.35(190)		
	い い え	1.87(235)	4.60(239)	1.72(240)	1.77(241)	3.45(234)	3.35(238)	1.70(243)	12.51(222)		
	わからない	1.84(55)	4.13(54)	1.49(55)	1.65(57)	3.17(54)	2.83(54)	1.48(56)	11.50(48)		
	検 定		(*)	(**)(*)(**)	(*)(**)(**)		(**)(**)(**)	(**)(**)(*)	(*)(**)(**)		
お父さんやお母さんに今の住宅について、こうしてほしいとかいう希望などを話したことがありますか	は い	1.82(165)	4.55(164)	1.76(163)	1.78(166)	3.44(162)	3.41(159)	1.75(168)	12.47(152)		
	い い え	1.84(282)	4.57(285)	1.69(281)	1.76(285)	3.38(280)	3.29(279)	1.70(288)	12.37(263)		
	わからない	1.90(48)	4.04(51)	1.43(51)	1.65(52)	3.21(47)	2.82(50)	1.46(52)	11.36(44)		
	検 定		(**)(**)(**)	(**)(**)(*)			(**)(**)(*)	(**)(**)(*)	(*)(*)		
家庭科の授業で「住まいと家族」の勉強をしたことで家に興味をもつようになりましたか	は い	1.83(71)	4.49(74)	1.73(73)	1.82(72)	3.45(69)	3.41(71)	1.68(74)	12.47(68)		
	い い え	1.89(108)	4.66(106)	1.75(107)	1.83(109)	3.47(106)	3.42(106)	1.82(109)	12.67(102)		
	わからない	1.83(83)	4.53(80)	1.67(84)	1.70(83)	3.27(82)	3.12(82)	1.63(84)	11.95(76)		
	検 定			(*)			(*)	(*)	(*)		

** は危険率1%で有意を示す

* は危険率5%で有意を示す

() は平均値の差の検定における有意差

() は順位相関係数における有意性

< > はz検定における有意差

小学校児童の住空間に対する認識と志向

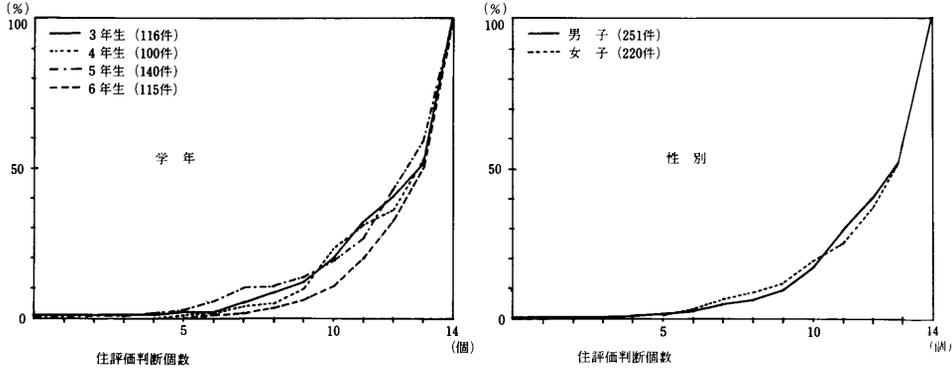


図4 児童本人の条件要別住評価判断個数の累積度数分布

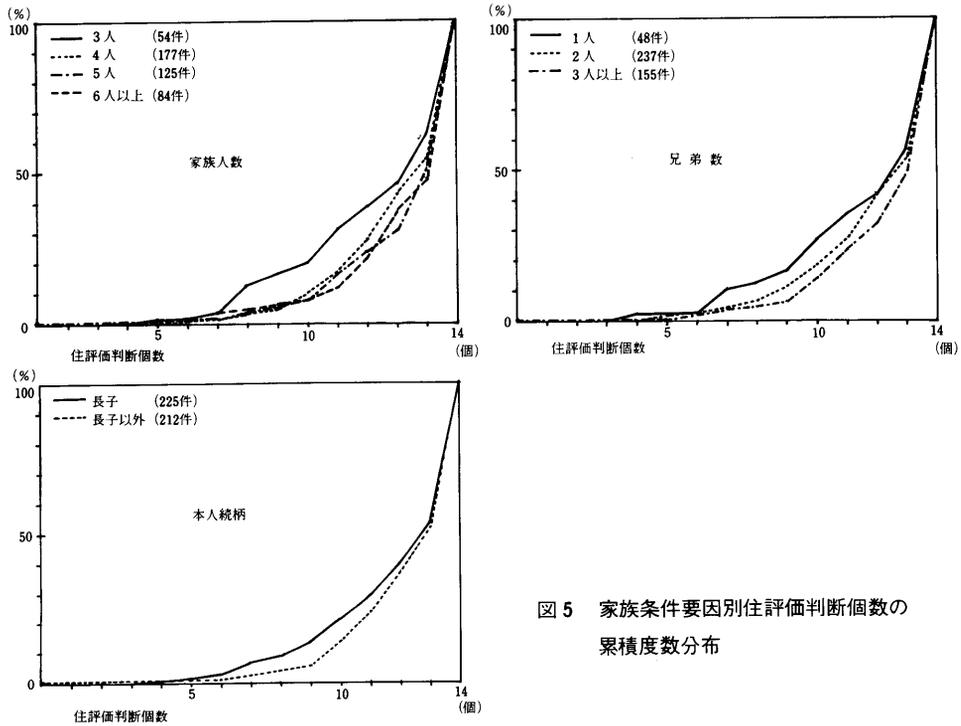


図5 家族条件要別住評価判断個数の累積度数分布

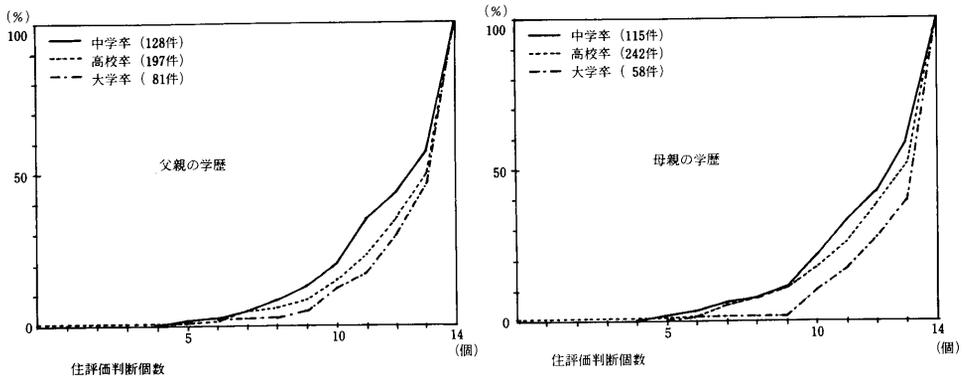


図6 社会的階層条件要別住評価判断個数の累積度数分布

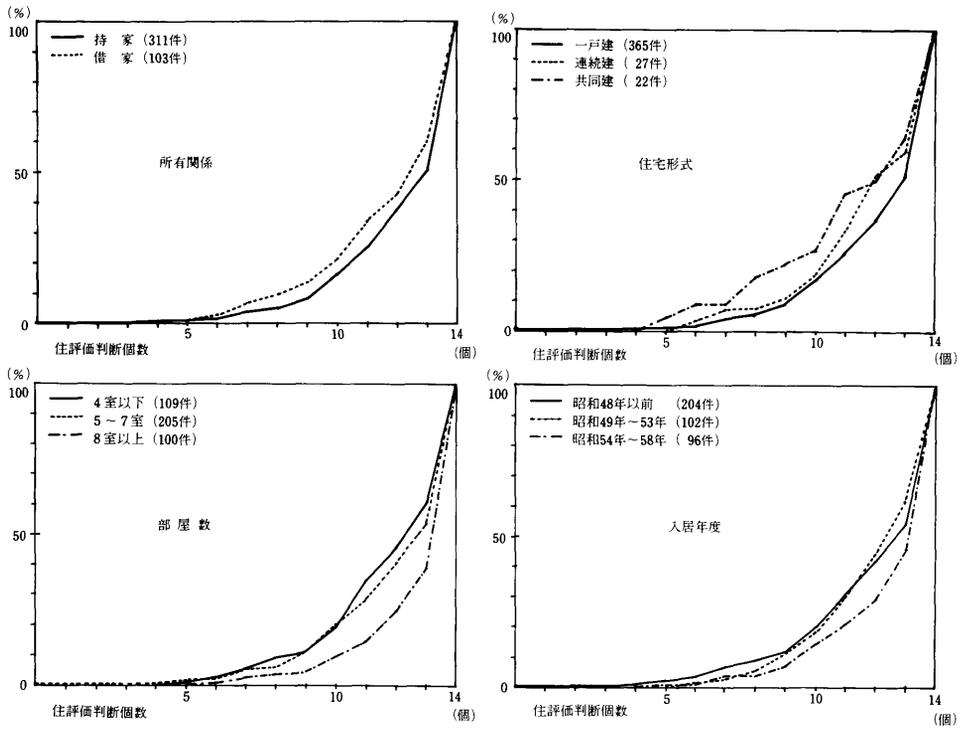


図7. 住空間条件要因別住評価判断個数の累積度数分布

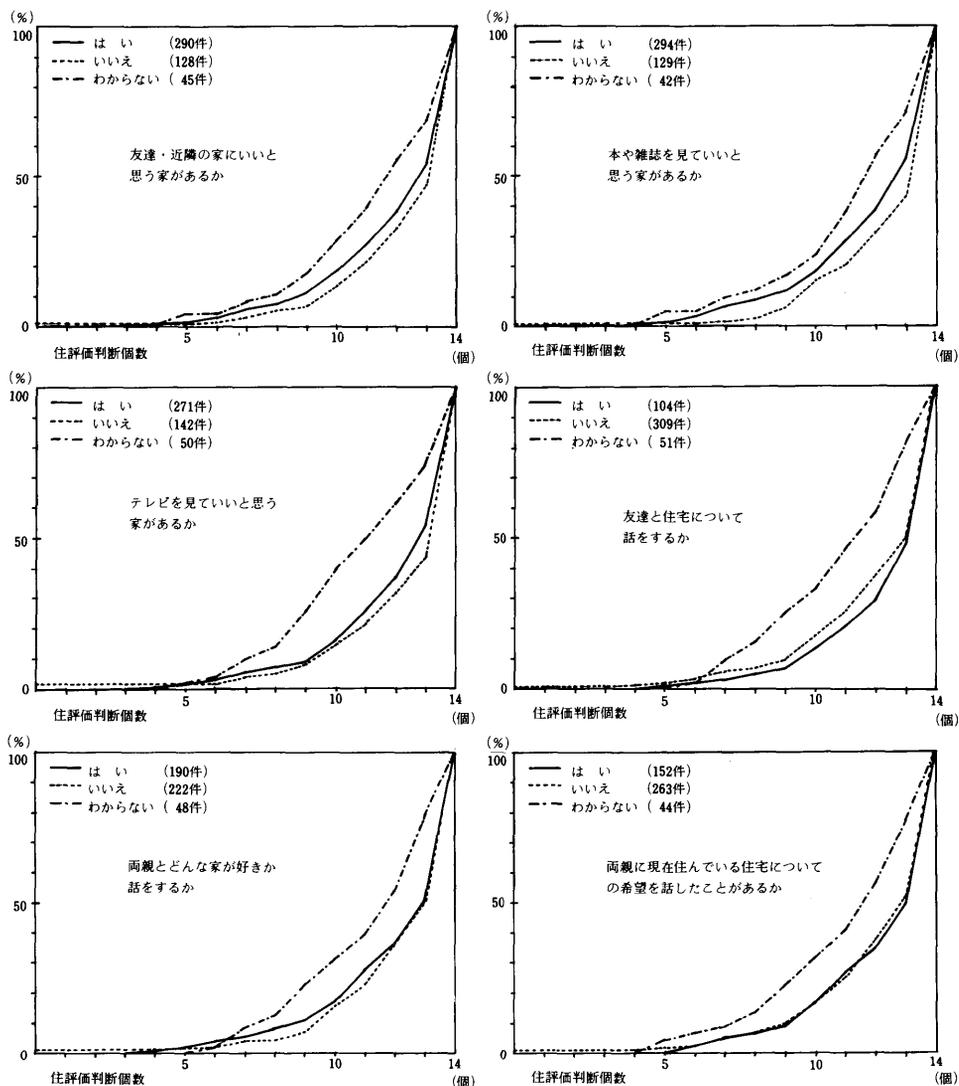


図8 児童の住空間に対する興味・関心条件要因別住評価判断個数の累積度数分布

4. 結 語

小学校3年生～6年生の児童を対象に、児童が居住している住空間に対して、どの程度評価判断できるか、またそれは性別や学年によってどの様な差異があるかを検討し、その評価が正当なものであるかどうかについても検討を加え、さらに住評価判断の構造と、住評価判断に影響を与える要因についても分析を行なった。その結果、以下の知見を得た。

- 1) 児童が居住する住空間に対する「住評価判断

率」は1項目を除きすべて80%以上の値を示し、小学生段階で住評価を行なうことはほぼ可能であるといえる。そのうち、行為目的が明確な空間の広さや住宅全体の広さ、室内気候に関する「住評価判断率」は高く、90%を越えるが、《項目の性格》が《空間の機能性に関する側面》や《空間の広がり》が《地域空間》や《屋外空間》に広がる項目、親の管理空間や行為目的が不明確な空間などでは低く、空間認知がやや困難であることがとらえられた。また、男女の性別による「住評価判断率」にはほとんど差は

認められないが、女子では生活用品の収納と関わる項目の「住評価判断率」が男子より高く、男子では地域空間を対象とする項目が女子より高い。

2) 学年別に「住評価判断率」をみると、〈住宅の全体的広さ〉の側面や行為目的が明確な空間、室内気候についての認知は小学3年生段階ではほぼ完了し、4年生で住宅の屋外空間に対する認知、6年生で行為目的が不明確な行為空間や行為空間以外のサービス空間、および空間の使い方や機能性についても認知がほぼ完了する。しかし、面積的側面以外で住宅の全体的把握が必要な「住宅全体の間取」については、6年生段階でもその「住評価判断率」が80%を下回っており、認知が完了するとはいえない。

3) 因子分析を用いて、児童の住評価判断の構造を検討した結果、第1因子は家具関係項目の因子、第2因子は行為目的の明確な部屋の広さに関する因子、第3因子は住宅の全体的把握を必要とする評価項目に関する因子、第4因子は住宅全体の面積的側面に関する評価の因子の4つの因子を抽出した。

4) 母親の住評価と児童の住評価との関連を検討した結果、対象全体ではすべての項目において順位相関係数に有意性をもつが、児童の住評価の方に良評価が圧倒的に多い傾向がみられた。項目別にみると、客観的、物理的内容をもつ〈空間の実態的側面〉では相関が高く、住生活の内容や住生活と空間との対応についての理解が必要な〈空間の機能性に関する側面〉では相関が弱いことがとらえられた。すなわち、物理的に広い空間を対象としているかどうか相関に左右するのではなく、意味内容の深さと広がりに関わるといえよう。

5) 児童の住評価判断に影響を与える要因と、住評価判断回数との関連を検討した結果、住宅の広さ関係の評価では〈家族条件〉との関連が強く、住評価判断率が低い〈家具関係〉〈住宅全体〉〈空間の機能性に関する側面〉〈親の管理空間〉では、父母の学歴との関連が強いことが認められた。また、〈各部分空間の広さ〉〈家具関係〉〈空間の機能性に関する側面〉〈親の管理空間〉では〈住空間条件〉との関連が強いことがとらえられた。すなわち、家族人数や兄弟数が多く、長子でない児童の場合、父母の学歴が高い場合、現住宅が持家で一戸建および部屋数が多く広い住宅の場合に、児童の住空間認知が促進される傾向が明さらかになった。

(注)

- 1) 因子分析の因子抽出法は、共通性の反復推定の主因子解を用い、固有値1.0以上の因子を抽出することとした。因子の回転には、バリマックス回転を用いた。
- 2) 項目番号⑥は、児童用では「自分がねるへやの広さ」で、児童本人の就寝空間だけを対象としているが、母親用では「個室・寝室の広さ」で、個・寝室全体を対象としており、それぞれ評価対象が異なるため、児童と母親の住評価における順位相関係数算出項目から除いた。